県 中 的 情 報 源

ナニージャ

発行元　徳島県立中央病院ナニージャ作成委員会
770-8539　徳島市蔵本町1丁目
電話 088-631-7151(代)　平成23年5月発行(年4回発行)

車がレトロで、木の葉っぱが生えていない！！
あとは同じだが・・・

東日本大震災における医療支援について

救急科　三村　誠二

平成23年3月11日は日本人にとって忘れられない日になりました。アメリカの同時多発テロは9月11日で、奇しくも11日が共通。アメリカが「911」なら日本は「311」が国民の心に刻まれた数字となりました。どんな先進国であっても自然の驚異の前にはなすすべもなかった、ということです。しかし、救援活動、復興・新生にむけての活動は、「がんばれ日本」のかけ声の通り今後の一致団結した動きにかかっていると思います。これが良い意味での「協力」に結びつけばいいのですが。

3月11日発災後、すぐに厚生労働省からDMAT（災害派遣医療チーム）の待機・出動要請がかかりました。しかし徳島県にも「大津波警報」が出されていたため、県内のDMATは自施設で待機、第一波が甚大な被害をもたらすものでなかったことを確認したのち、当院から私を含むDMAT第一班が出動しました。伊丹空港から岩手県花巻空港に入り、SCU（広域医療搬送拠点）の設営を行いました。これは被災地域から重症傷病者を自衛隊機で被災地外に搬送するためのシステムです。2日間花巻空港で任務にあたった後徳島県に帰りましたが、翌日には医療救護班の準備にとりかかりました。徳島県は宮城県を支援することが決まっており、当院医療救護班第一班は私と看護師２名、薬剤師1名、事務調整員1名で宮城県石巻市に入りました。その他にも心のケアチーム等も同時に宮城県に入っています。

石巻市は人口16万人ですが、最も津波被害が大きかった地域の一つです。徳島県医療救護班は、石巻市の東部、万石浦中学校という学校の保健室に、職員の皆さんに多大なご協力を得て救護所を設営しました。同学校には1000人の被災者の方々が避難、電気も水もまだ回復しておらず、不自由な生活を強いられていました。受診される患者さんは1日100名近くにのぼり、風邪、胃腸炎、怪我などが主な傷病でした。

地震前から飲んでいた糖尿や高血圧の薬を津波で失ったという人も多く、あまりにも薬の多い日本のことですから、すぐには渡してあげられない薬も多くありました。また、津波で肉親を失った方々が、不眠や不安など精神的な症状を訴えて受診されました。一歩のところで生死を分けた瞬間、大事な方々を亡くされた被災者の皆さんに、どのような言葉をかけてよいのか分かりません。ただ話を聞くのみです。

救護所となっている各小中学校の周囲の町並みには、テレビで報道されているような、瓦礫、道路に横たわる船、あちこち転がる自動車、打ち上げられた汚泥が乾いた粉塵・・・実際に目の当たりにすると、逆にその現実感がない風景に、感覚が麻痺してしまいます。また余震も多かったため、災害はいまだ進行中である、と実感しました。

その後も3日毎の交代で、徳島県からは医療救護班がずっと石巻市に入っています。医師会や徳島大学の皆さんも加わっています。足りなかった薬剤を追加し、血液検査機器なども導入し、小さなクリニックのような救護所で今も診療を続けています。もちろん現地のニーズも刻一刻と変わっており、現在では保健や福祉の内容も含めて、被災地に歩をあわせて支援を続けていく予定です。

しかし、ご存知の通り「東南海・南海地震」では徳島県も同様の、いえもっと大きな被害を受けるかもしれません。徳島も今からできること、「避難タワー」や「備蓄」「避難訓練」「集団一時移住の計画」「災害マップの見直し」などしなくてはならないことが目白押しです。被災地を支援し、被災地に学び、今できることを「する」ことが重要と思います。

いきなりコーヒーブレイク

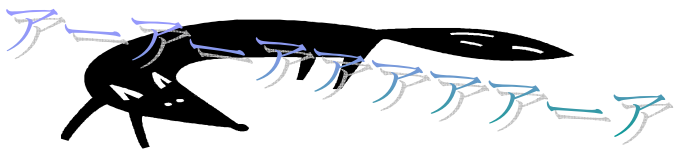
皮膚科　敷地　孝法

北の国から「’84　夏」

「北の国から」というテレビドラマを覚えていますか？このドラマは1981年～2002年までの21年間にわたって放映された、北海道の富良野を舞台にした一家族の物語です。1983年からは年1回のスペシャル番組になりましたが、放映が21年間も続きかつこの長い間、出演者・スタッフがすべて同じメンバーで撮影されたというドラマはきっと最初で最後でしょう。逆にそれがために撮影を打ち切らざるを得なかったようです。

あるアンケート調査によると、そのドラマの名シーンで1位となったのは「’87　初恋」の最後の場面で、富良野から東京へ向かうトラックの運転手さんが交通費として父親からそっと手渡されていたお金【かの有名な泥のついた一万円札2枚】を純（長男　当時15才）に返すシーンでしたが、個人的には「’84　夏」のラストのラーメン屋のシーンが一番心に残っております。

このマイベスト「’84　夏」では、純（当時12才）は父親が苦労して建てた丸太小屋を自分の不注意で全焼させたり、東京から来た生意気な小学生のパソコンの本を盗んだりしますが、これらのことをすべて親友の正吉が罪をかぶります。そのことがずっと気になって、純は最後の最後にラーメン屋で泣きながら父親に「自分がやりました。ごめんなさい。」と正直に告白するという設定でした。紙面の都合上詳しくは書ききれませんが、作家の倉本聰さんはこの「こども心の純粋さ」を見事に表現・演出しており、私の心にズシンと響いたのです。



今年の3月、私の次男の保育園の卒園式がありました。卒園生は14名。みんな最高のおしゃれをして手作りの小さな椅子に座り、名前を呼ばれると一人一人が園長のところへ出て行って卒業証書を受け取り、「〇〇小学校へ行きます！」と大きな声であいさつして自分の席へ帰っていきました。私は対面して座っている親たちの中の一人として各園児の表情をそっと覗いていると、意外にも多くの子供が笑顔を見せており、子供たちの成長ぶり、たくましさに驚いていました。ところがそのあと、担任の先生のピアノの伴奏で今まで練習してきた歌をみんなで歌う段階になると、一番ニコニコしていた一人の女の子が突然泣きだしました。すると残りの13人全員が連鎖して大泣きで泣き始めたのです。

実はみんな極度に緊張していたのです。また仲良かったお友達と別れる寂しさを極限まで心の中でためていたのかもしれません。人生はじめての晴れの舞台であり、大勢の大人の前で、一生懸命笑顔を作っていたのかもしれません。次男も泣いていました。次男が今まで感動して泣く姿は見たことがありませんでした。この子供たちの姿を見ていた時に、ふと先ほどの「’84夏」を思い出したのです。「こども心の純粋さ」は私たち大人が決して忘れてはならない、人間の本質に通じるコアな部分だと思います。

この度の大震災で、この純粋な子供たちの命がどれほど失われたのでしょうか。胸が痛んでなりません。

酔っぱらいのたわごと 12

小児科
湯浅安人

「春の出来事」

三月十一日、東日本大震災のあった日の夕方、県南の叔父の家に電話をかけたが応答がなかった。おそらく高台へ避難しているのであろうと考え、テレビで県内の津波情報を見ていた。翌日聞いてみると、確かに一度は避難したが、たいしたことがないのですぐに帰宅したとのこと。昭和の南海地震を経験した者でもこのありさまなので、津波の怖さを知らない人間が、本気で避難しないことは想像に難くない。

四月中旬になってやっと県南の実家へタケノコ堀りに行った。昨年より半月ほど遅い。小さいのもいれて十本ほど掘った。この数年、実家のあたりでもイノシシや鹿が出没しタケノコ等も被害を受けているらしい。竹藪の手入れをしてくれている叔父の話では、昨年は鹿にタケノコが食べられ、一昨年はイノシシに食べられたとのこと。食べあとからどうして判るかと聞くと、イノシシは地中から掘り起こして食べ、鹿は上の方から食べることと糞が違うから、とのことであった。

その昔、「奈良の春日の青芝に～、腰を下ろせば鹿の糞～、フンフンフン黒豆よ・・・」という歌があったが、歌っていたのはなんとあの清純女優“吉永小百合”であった。イヤ

これはこれは居酒屋ネタで恐縮。

ちなみに、枯れ葉や草が除去された手入れの行き届いた竹藪では、地面の割れや湿り気で地中のタケノコが判る。しかし、うちの竹藪は枯れ葉・草が多く、視覚による発見は難しいので、ひたすら歩き回って足裏の感覚で探すのであるが、これはこれで高度な技術と言えよう。黄色い先端がみえたら、その根っこがどちらに向いているかを瞬時に判断し、鍬（クワ）を入れる場所を決める。普段、力仕事をしていないので、一本掘ると息切れがして足腰が痛む。掘ったタケノコは、米ぬかと一緒に茹でてアクを抜く。醤油味のタケノコもいいが、ミソ和えにして木の芽を散らすと春の香りがする。ここは日本酒の燗酒がほしいところですな。

さてついに一歳五ヶ月の女の孫に遊山箱を買うことにした。昨年、ワインに化けたへそくりが少し残っていたのである。赤い箱にピンクの桜吹雪が描かれた女の子定番の模様である。まことにインターネットは便利なものですなあ。遊山箱に料理をつめて、孫の手を引いて裏の眉山でピクニックでもするかな。これはもう全くのおじいちゃんナノダ。でも「じいちゃん」とは呼ばさずノンノ（イタリア語でおじいさん）と呼ばせている。ハイ、私がノンノです。

研修医が主役

研修医珍道中（in Seoul）

臨床研修医2年目　田村　潮

高校生の時に修学旅行で食べた韓国のキムチが日本のキムチよりもおいしくて感動した記憶をたよりに、研修科の変わり目の隙をついて、誰にも言わずに韓国に弾丸ツアーに行ってきましたのでその報告をします。
思い立ったのはGW2～3日前で、ノープランでとりあえず韓国にいくこととしました。
直前予約でも意外と飛行機も乗れてしまい、あれよあれよという間に気づくとソウル市内にいました。
英語圏なら何を言っているか、何と書いてあるかを雰囲気的に感じ取ることができるのですが、残念ながら行き先は韓国。ハングル文字です。当然ハングルなんて読めない僕にとっては恐怖でした。まあカタコトの英語で話せばいいかと思っていたのですが、普通にハングルの下に日本語書いてるし、現地の人も普通に日本語で話しかけてきました。
親不孝な僕はソウル市内のホテルに荷物を置いたとたんにカジノへ向かいました。そして、さっくりと、軽く散財した後にソウル観光開始です。
とりあえずソウルの中心街である明洞をぶらぶらと散策し適当に食堂にはいると何も注文していないのにキムチが出てきました。さすが韓国。
気になるお味は・・・日本で食べるのと変わりありませんでした。きっと日本のキムチのレベルがこの10年で劇的に上がったんだと自己暗示をかけつつ今回の旅の目標が終了してしまいました。
円高の影響もあるのですが韓国は物価が安いです。そしてオマケが多いです。IKKO絶賛の店と、はるな愛絶賛の店が妙にいっぱいあります。
しかし、散々遊んで日本に帰ってくると一気に現実に引き戻されてしまい切なくなります。
これからも隙をついて旅行にこっそりと行こうと思いますので、その際はまた事後報告します。

ご意見箱

（皆様方からいただいたご意見にお答えするコーナーです）

【ご意見】

先生はじめ、お世話していただいた看護師の皆さん本当にありがとうございました。職種は全く違いますが、同じ公務の仕事をしています。入院中に皆さんの仕事ぶりを見て、迅速さそして丁寧な対応に感動しました。無事退院となることが、また、仕事復帰の日は未定ですが、早期に仕事復帰し、皆さんの仕事ぶりを見て受けたいい刺激を今後の業務に生かしたいと思います。耐震改修で新しい病院となるみたいですね。早期に新しい病院が完成し、素晴らしい環境とスタッフのもとで、今後も素晴らしい仕事がんばってください。ありがとうございました。

【お返事】

感謝のご意見をいただきありがとうございます。今後も職員一同やさしさを持って診療・看護に専念し、このようなご意見を頂けるよう努力してまいります。今後もお気づきの点やご要望がございましたら、ご遠慮なくお申しつけください。

キノアヤコの・・・

2

私の最近読んだ本」

医療教育　木野　綾子

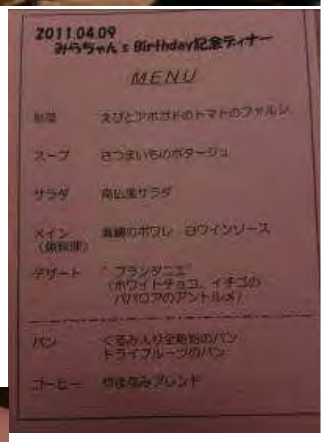
趣味の読書は、どんなに忙しい時でも、週２冊以上を読破するペースで続けている。尊敬する柳田邦男氏は「専門書以外を１日３０分以上読む」ことを推奨されている。その言葉に影響を受けた面もあり、活字を見ないと寂しい感もある。
「桜の季節になると、新入社員のスーツ姿が新鮮だったのは、何だか過去の出来事だったような気がする。」なんて、やっと新人研修の第一弾が終了し、散りかけた桜を見ながら思った。と言うのも、今年の新入社員は、どんな歩みをしていくのかなと思うと同時に、新入社員はどのようにして、このスタートラインにたったのかなという思いにかられたからだ。
そんな時に手にした本が石田衣良の「シューカツ」である。東京の私大に通う大学３年生７人が“シューカツプロジェクトチーム”を結成し、マスコミでの内定をもらうまでの１年間を詳細に綴った小説である。この小説で私が“すごい”と思ったことが３つある。
1つは、彼女たちは一生の仕事を決めるのに非常に真剣だということだ。その真剣さは、情報収集の綿密さにもある。面接でグループディスカッションが多いという情報からその評価基準をも把握する。そしてグループディスカッション練習を行い、一人一人に評価を返すなどリアリティのある練習を繰り返していく。また、エントリーシートを書くにも、印象に残る書き方だけでなく、字数の限られたシートに会社に対して攻める要素を入れるようにしている。
２つめは、仲間同士で目的意識をしっかり持って行動していることである。ディスカッション練習も、エントリーシートの記入も、仲間同士で議論しながら個人の資質をどんどん高めている。また、不安で押しつぶされた仲間をフォローすることも怠らない。
そして３つめは、就職をするのは（すごい）大変なのだということである。この小説はマスコミへの就職という限定された業種ではあるが、確かに就職浪人という言葉も登場した。新卒というのはゴールデンチケットのようだ。１回だけ使えるこのゴールデンチケットを有効に使えないと、社会からも認められない人間だということらしい。
そんな“すごい”をこの小説から感じて、今年の新入社員もすごいんだなと思わずにはいられない。受験勉強ではなく、コミュニケーション力とか人間力を鍛え、更にシューカツを通してコミュニケーション力とか人間力に磨きをかけた新入社員なのだから、その力を就職後も伸ばし続けてもらいたい。

連載　～ロバートの自転車旅行記（１２）～
～ロバートのはっぴいレシピと”私のお父さん”の巻～

事務局　環　隆志

ロバートは自転車を漕ぐだけでなく、実はパティシエだったりします。
先日ロバートの娘ことナポリ（？）の４回目の誕生日で、親族が集まってパーティをしました。ロバートはナポリの誕生日の度にバースデイケーキを作ってきましたが、今回は張り切って、フレンチのフルコースディナーにトライしてみました！
早朝４時にケーキの生地とパン焼きからスタート。午前中にケーキを完成し、午後からはオードブル・スープの準備、メイン料理の仕込みと、夕方までてんてこ舞いでした。
テーブルにはピンクのテーブルクロスを引いて、カトラリーや、この日のために購入（@ビレッジカキハラ）したワイングラスをセットしました。－お店風に－
夕方みんなが集まりパーティの始まりです。まずは食前酒で乾杯から。料理は最初に全て出してしまえば楽なのですが、せっかくなので順番にサーブしました。スープが済んだところでメインの仕上げにかかります。

メインは、「真鯛のポワレ　白ワインソース」。白ワイン・バター・生クリームで作ったソースを皿に引き、大豆のブイヨン煮を盛り、その上に真鯛のポワレ（フライパンでソテーしたもの）を乗せ、ハーブと茹でたアスパラガスを添えて出来上がり～♪
（…しかしフランス料理は何かと手が込んでいますね。作るのが大変です！）



そしてデザートはロバート定番の”プランタニエ”－ホワイトチョコ＆苺のババロアのアントルメ（ホールケーキ）－。
頑張った甲斐あってパーティは大成功、ロバートのお料理を楽しんでいただけたようです。ナポリもみんなからプレゼントをもらって、とても嬉しそうでした。
ところでBGMは、ナポリだけに（実際、娘の名前はイタリアのある都市名です）、NHK名曲アルバム「イタリア編」のDVDをかけていました。すると流れてきたのは図らずも、プッチーニの『私のお父さん』という歌曲であった。

ああ、私の大好きなお父さん　彼が好きなの、素敵で素敵なの
ポルタ・ロッサ通りへ行きたいの　（結婚）指輪を買う為に！
そう、そうなの　私は行きたいのよ！
もし、私の恋がかなわないなら　ヴェッキオ橋へ行くわ
アルノ河へ身を投げる為にね！　私はもだえ苦しんでいるの！
ああ、神様　私を死なせてください！
お父さん、お願い、お願いよ！

ナポリも、いつかこんなことを言うようになるのだろうか。

5階病棟スタッフ

【編集後記】

実はわたくし、根っからの広島カープファンなのです。カープが負けたその日のスポルトはみません。平井理央さん好きですけど、我慢します。
ですので、ここ数年はあまりスポルトみることはありませんでした。が、・・・そのカープが今年は調子いいんです（川平慈英風に）。昔のカープらしいのです。前例どおりだと大型連休過ぎから、徐々に落ちるんですけどね。がんばれカープ！！

このたびの震災によりお亡くなりになられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々とそのご家族及び関係者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興を切に願っております。

ナニージャ編集委員　有馬